

「震災、コロナ禍を乗り越え、みこし渡御復活の一步」

20211年3月11日の東日本大震災の津波被災地となった名取市閑上地区。750人が犠牲になり、古い漁港町が壊滅した閑上には今、新しい街とともに、昔から地元の信仰を集めてきた閑上湊神社が再建されている。昨年、神社の秋の例祭の呼び物、「神輿（みこし）渡御」取材し、担ぎ手たちの熱気に震災前の閑上のにぎわいを感じた。長年、住民のつながりの象徴だった神輿は、しかし、震災、そしてコロナ禍とともに地元の担ぎ手が減少。今は遠来の助っ人たちに支えられている。街の変化を移す神輿は、これからどうなっていくのか。閑上中央町内会長の長沼俊幸さん、住民の荒川裕一さん＝ともに61歳＝の思いを紹介し、未来に伝えてゆく知恵を集めたい。

コロナ明け、4年ぶり雨の中の活気

閑上湊神社の秋の例祭と復興祈願祭が2023年10月15日、閑上地区で行われました。メインの「神輿渡御」がコロナ禍の中断を挟んで4年ぶりに行われ、担ぎ手の威勢のよい掛け声が響いていました。私もこの日、ちょうど閑上を訪れ、神輿渡御を実際に見ることが出来ました。担ぎ手の熱が見ている人達にも伝わり、とても活気に溢れたお祭りだと感じました。

その日は雨であり天候には恵まれませんでした。それでも神輿を担ぐ人たちの活気によって大いに盛り上がっていました。お祭りに参加していた荒川さんは「コロナで神輿渡御ができていなかったが、またこうして開催することができて良かった。これからが始まり。活力ある街にしたい」と語りました。では、もともと閑上ではこの祭りがどのような存在であったのでしょうか。

町の先輩、後輩が交流する機会に

長沼さんに聞いたところ、閑上湊神社で男の本厄にあたる42歳の人たちが神輿を担ぎ、町を練り歩く祭りでした。そこから本厄の前後にあたる41歳、43歳の歳の男衆も加わり、3年間、神輿を担ぐことになったそうです。

「初めの頃は少し面倒だ感じていた」という長沼さんも、神輿渡御に参加するうちに「やってみると楽しいと感じるようになった」。参加する人たちとの語らいも楽しみの一つで、「お祭り当日は夜までお酒が入ることもあり、担ぎ手が一緒になって盛り上がっていた」と、思い出を懐かしみました。住民たちも、みこしの担ぎ手たちにお酒や食べ物を準備して迎え入れ、町を挙げて盛り上がる、閑上の象徴的イベントでした。

震災前のみこし渡御は、地元の先輩方からの誘いで人が集まり、神輿渡御の時に会える昔なじみのとの交流も楽しみでもあり、人と人との縁がつくるお祭りでもありました。

震災後の復活も、人の関係は薄れ

東日本大震災で、閑上湊神社は1903（明治36）年築造の社殿が津波で流され壊滅的被害を受けました（日和山の仮社殿を経て2020年に再建）。津波によって流された神輿も12年、岐阜や東京の神社などから大みこし、子どもみこし4基が寄贈されて、神輿自体は復活しました。

しかし、町も家も失い、閑上から離れてしまった人も多くおり、神輿渡御参加の伝統となっていた「先輩方からのお誘い」という関係も薄れてしまいました。長沼さんと荒川さんも「震災前と比べると祭りの活気が無くなってしまった。活気が戻ってきてほしい」、「神輿で盛り上がる閑上を知っている私たちにとって、今の現状は少し寂しい」とも語ります。

神輿渡御でお祭りの活気を取り戻そうとしていた矢先、今度はコロナ禍の時期に入ってしまう、「イベントやお祭りがほとんどできなくなってしまった。再建された閑上に新しい住民が増えてきたタイミングであり、閑上のお祭りを知らずに新住民が生活を始めることになった」と長沼さん。「新しい住民がコミュニティ活動に参加しにくくなってしまい、今後いかに新旧住民のつながりをつくっていけるかが課題だ」

未来の閑上、新しい神輿の形

今、神輿渡御に参加している多くの人が、地元の住民だけではなく、全国から集まった担ぎ手たちだ。これは、大勢のボランティアが閑上の復興に関わり、その過程でできた人の繋がりがあるからこそ、と言えます。この姿こそ、新しい閑上のみこし渡御ではないか、と私は考えました。

長沼さんも「今までは閑上の住民たちで神輿渡御を受け継いできたが、震災を経て、閑上の人だけでなく、広く人に集ってもらうことも重要だ」と言います。「お祭りや、神輿を担ぐことが好きな人に閑上への興味を持ってもらい、全国からの参加者が駆けつけて、神輿渡御が盛り上がる。そんな形こそ、新しい閑上の神輿渡御」であると。

それが続いていくことが一番大切であり、「神輿渡御を知らない、新しい住民に盛り上がりを見てもらうことで、興味も、参加したい気持ちも生まれる」。それによって、将来的に地元の住民と全国から集まった担ぎ手が一つになっていくことが理想なのでしょう。荒川さんも「住民が一緒になって盛り上がる閑上を見ることが今後の楽しみだ」と言います。

震災によってさまざまな古いものがなくなってしまった閑上も、「新しい閑上」として変わっていく途中であり、神輿渡御もその1つ。雨の中で行われた4年ぶりのお祭りでしたが、その熱気は、閑上のまちづくり、そしてみこし渡御の新たな1歩なのです。

「震災が残した傷跡、それでも前へ～つらい過去、難しい現状、これからの閑上」

2011年3月11日に起きた東日本大震災から間もなく13年が経つ。津波被災地の名取市閑上で自治会長を務める長沼俊幸さん(61)に取材する機会を得て、知ったのは「復興」がいまだどこにもない、という被災者の心情だった。きれいに再建された閑上の街から震災当時の深い傷は窺い知れず、被災後の避難所、仮設住宅の歳月は伝承すらされていない。語られてこなかった当事者の体験と思いを掘り起こし、共有してもらえたらと願う。そこから、私たちにも何ができるのか、見えてくるのではないか。

住民を離散させた閑上の「現地再建」

閑上地区は震災前、海沿いの漁師町であった。2500世帯、6500人ほど住んでいて、亡くなったのはその1割を超える750人(35人が不明)。一つの町単位で800人近い人が犠牲になったのは閑上だけという。

津波は海拔8.4mの高さがあったといわれる。3階建ての市営アパートの天井まで達し、最上階まで上がって助かった人はいない。ほとんどの住宅が流されるという大きな被害を受けた。

長沼さんは「閑上は『津波が来ないという街』と住民の間で言われていた。そういった安全神話のようなものが被害を大きくしてしまった。今の閑上には日和山以外に、震災前のことを思い出せるものがほとんど残っていない」と語った。

震災後、閑上は名取市の復興方針で、被災した元の土地に「現地再建」を行った。現地再建を選んだ町は、閑上と石巻の一部だけ。他の自治体では「集団移転」をし、津波の来ない高台や内陸に住宅地を造って移転した。

市は、古い閑上を残して現地再建をしたいと考え、一方の住民は「津波の心配のない安心な所に移転したい」という人がほとんどだった。そこで合意形成ができず、現地に戻った住民は3分の1に減り、他の人々は各地に離散した。閑上は被災地の中でも新しい街づくりが一番遅れ、震災から3年間は何も手を付けられなかった。

長沼さんは「私が思っていた唯一の復興は、昔ながらの閑上の人たちと、場所は変わっても、どこかの町で一緒に新しい生活を始めること。それが復興だと俺の中で思っていた。でも、市の新しい街づくりが迷走し、『もう戻りたくない』という人もたくさんいた。震災から4年目くらいに、もう俺の考えた『復興』はなくなった。年々、心に寂しさが増す」と語った。

伝えられていない避難所、仮設住宅の日々

長沼さんは震災後、避難所に入り、市役所とのパイプ役や支援物資の分配の手伝いをした。

「避難所にいる人たちは皆余裕がなく、互いの仕切りもない状態でピリピリしていた。物資が盗まれたり、トラブルが起こったり、異常な状態だった。食料も毎日同じようなもので耐えた。そういったストレスも、本来は段ボールの間仕切りひとつで和らげられるんだ。12年前はそうした対応が遅れたが、次の災害時に教訓を生かせるよう、伝えること、備えることが大切だ」と語った。

仮設住宅では「隣人同士のトイレや話し声、生活音が聞こえてきた。家族を亡くした方も多く、精神的な辛さに加えて、子どもたちも成長する年月、四畳半二間ほどの狭い居住環境で過ごすのはきつかった」という。

しかし、こういった避難所での出来事、仮設住宅での生活の問題点は、震災後に伝えられることは少なかった。避難所と仮設住宅の暮らしは長沼さんで6年におよぶ。被災時と現在の目に見える新しい閑上の街の間にある、当事者たちが本当の苦労を重ねた時期だ。それが伝えられず、忘れられていることに、長沼さんは疑問を呈した。きちんと記録に残さなければ、当事者の体験、思いは消えてしまう。これからでも共有することが大切だと私は感じた。

新しい閑上の街の理想と現実

昨年10月、取材に訪れた閑上の日和山の上で、長沼さんは新しい街並みに立ち並ぶ災害公営住宅を指して、当時のことを次のように語った。

震災後、閑上の復興について、市は災害公営住宅街を建てて街を再建することを計画していたが、津波体験の恐怖から「閑上に戻りたい」とする住民の数が3分の1まで減り、国との間で調整に手間取り、計画は遅れたという。

「現地再建が遅れたことで、仮設住宅での暮らしが長く続き、住民同士の繋がりが深くなった。しかし、新しい公営住宅への入居は『公平な条件』にこだわる市によって、くじ引きで決められた」

「それが原因で、仮設で培った住民同士のコミュニティが一気に崩れ、慣れないアパート風の生活を強いられた住民が多く、孤立し、居室にこもって出てこない人が相次ぐ結果となってしまった」

コミュニティづくりの難しさに苦心

現地再建に伴い、商業地区が広く建設され、名取川沿いに「かわまちてらす閑上」という新しい閑上のランドマーク、観光の目玉としてオープンした。

「観光名所として人を呼ぶにはいいかもしれないが、そこで暮らす人の日々の生活には必要ではない。スーパーのほうがよく助かる」

そうになった理由について、長沼さんは「住民と市長・行政の間で、そこで生活する人へのイメージがずれている。そういったことが腑に落ちない」と語った。

長沼さんは帰還後、閑上中央町内会長として、震災前からの閑上の住民と、新しく移住してきた住民のコミュニティづくりに取り組んでいる。「しかし、イベントを催しても、新しい住民が来てくれるのは最初だけで、長く続かない。昔からの住民も高齢化して動くことがままならない、コロナ禍の影響もあ

り、町内会への参加率も低くなっている。震災体験の伝承や共有を前に出せば、新しい人たちは離れてゆく。とても難しい」

終わらない震災、体験と教訓の共有を

長沼さんはさらに「閑上に新しい町ができてにぎやかになっても、『まだ来られない、話せない』という体験者がいる。それが被災地なんだ。閑上だけじゃなく、どこもそうだと思う」、「にぎやかになったところを見てほしいが、そうではないことも知ってほしいなと思う。それが災害。終わりってないんだ」と言う。

震災から何年が過ぎようと、「復興」というものはない。震災はずっと続くのだ。次にまたいつ、大きな地震や津波が起こるか分からない。だから私たちは備えることが必要だ。できることは、被災地に訪れ、長沼さんのような当事者の語りに耳を傾け、その体験と教訓を共有することではないだろうか。

受講生が閑上を訪ね、日和山で被災当時と現在について取材＝2023 年 10 月 21 日



「新しい街と昔の閑上をつなぐコミュニティ、どうつくれるか？」

2011年3月11日に起きた東日本大震災。あの日の津波で名取市閑上の昔ながらの街並みは失われ、今、震災前とは全くの別の街となってしまった。多くの新しい家、道路、学校、遊び場、商店街がある閑上で、唯一変わらないものが海拔6.3mの日和山。ほかに昔をしのばせる場所はない。昔の街並みだけではなく、歴史ある漁港の絆深い暮らしも失われた。震災後の新住民も増えた今、どんなコミュニティを築いていければよいのだろうか。

新住民の増加と新たな課題

震災から間もなく13年。被災した街の跡にかさ上げ工事が行われた、新しい閑上には他の地域から新たに移住してきた人が多い。昨年4月時点で人口は3000人を超え、若い世代や子育て世帯の割合も増加している。

19年3月に発足した閑上中央町内会の会長、長沼俊幸さん(61)は、昔からの地元出身の住民と、新たに移住してきた住民の交流とコミュニティづくりを模索してきた。忘年会や新年会、夏の盆遅りやカラオケ大会、そして閑上湊神社の秋の例祭、復興祈願祭の子ども神輿(みこし)など、さまざまなイベントを企画しながら。

そのさなかの20年、コロナウイルスの大流行で国から緊急事態宣言が出され、町内会の集会やイベントのほとんどが中止になった。高齢者が多い住民は家や公営住宅にこもりがちな生活になってしまう。コロナ禍が落ち着いた後も、町内会やイベントへの住民の参加者は戻らず、若い新住民の家族の参加も少ないままだという。

「昔は、神輿を担ぐのは42歳の男の本厄だけで、先輩が後輩に声をかければ集まっていた。けれど今の人たちは、地元の先輩後輩との関わりが少なく、人が集まらない」、「月二回の班長会、役員会に、コロナ前はほとんどの人が来ていたが、コロナ後はやっぱり減ってしまった」と長沼さんは語った。

震災前の閑上のコミュニティ

長沼さんによると、震災前の閑上では住民同士の間柄が近く、「家の玄関や車のカギは閉める習慣がないくらい安全な町だった」。近所の人たちが地元の魚や食べ物をお裾分けする「おまがね」という文化もあった。「家に誰もいない時でも、近所の人勝手に家の冷蔵庫に魚を入れてくれて、それを普通にいただいた」。それほど互いの絆の深いコミュニティが昔の閑上には根付いていた。

「いやな思い出もある」と長沼さん。漁師町である閑上では、漁網に付いた小さな蟹やシャコを潰したまま天日に干しており、とても臭いがきつかったという。住民同士の噂話もすぐ広まり、「うざい街と思ってしまう」こともあったそうだ。

昔の閑上のようなコミュニティは取り戻せるか

長沼さんは自宅を津波で流され、仮設住宅の暮らしを6年間体験して、再建された新しい閑上の街に帰還。2019年3月、閑上中央町内会長に選ばれた。「最初は自分の生活だけで精いっぱい、コミュニティづくりからは少し距離を取ろうと思っていた。しかし、住民の集まり何度か参加し、いろんな人と話す中で、『閑上の人をつなかりを何とか再生しなければ』と決心した」

しかし、それから4年余りを経て、現実には「震災を経験した閑上出身者と新しい住民の間をつなぐのは難しい。深く共有できるものがないのと、震災の伝承などに重きを置けば一方で離れていく人たちもいる。昔の閑上のような街をつくるのは、自分の代では無理だろう」と語る。

これからの閑上のコミュニティ「共生」「共助」

現在の閑上で考えられるコミュニティとは、やはり旧住民と新住民との関係を深めることであると考ええる。新住民や若者に町内会やさまざまな地域イベントへ参加してもらい、経験の共有を重ねることで、年月を要するけれど、昔のような信頼関係のあるコミュニティに近づくのではないかな。

ここでいう「共生・共助」とは、世代に関係なくお互いを支え合うことである。登下校時の子供の見守り隊や子育て世代のサポート、高齢者の一人暮らしの安否確認など、住民がふだんの生活から自然な交流の機会をつくり、日常の関わりを重ねることで、地域に関心を持つ人も増えていく。

また、災害から身を守るためのハザードマップを用いて、住民と学校が参加する避難訓練を定期的に行うことも必要だと感じた。そこで、閑上ならではの津波体験の伝承や防災教育も生まれ、根付いていくのではないかな。一つの提案である。

「今、振り返る時間があってもよいと思う～3.11 から 12 年、あの日の思い出～」

2011 年 3 月 11 日、突如として消えてしまった日常がある。帰る家がないという受け入れ難い現実と、先の見えない避難所生活。あの日から間もなく 13 年。今、振り返ることで見えてくる、あつという間だった日々の記憶。話し、残し、つないでいく、被災の経験。自分の目で耳で見聞きした言葉と景色を伝えていこうと思う。

潮が香る閑上の町を訪ねる

尚絅学院大学の授業の取材で訪れた閑上地区。長い歴史とは対照的に、海と町を区切るようにしてコンクリートで築かれた防波堤と、新しい家々が立ち並ぶ景色は、あの3月 11 日から立ち上がり、歩み始めた町の姿を象徴しているようだった。

名取市の名取川南岸、太平洋に面する閑上という町は、江戸時代以前から漁業で栄えた町である。歩くと、海風とともに潮の香りが漂う。河口の港町だった閑上を襲ったのは過去に類を見ない大津波だった。

ふるさと喪失の現実を体験

「閑上は『津波が来ない町』という安全神話があった」と話す長沼俊幸さん(61)は今、閑上中央町内会長。11 年 3 月 11 日、消防団の「津波が来る、逃げろー!!」という声を聞いても、津波というものにピンと来なかったという。

自宅の 2 階で「どかーん」という音とともに吹き飛ばされた時、初めて津波というものを認識したという。「地震の揺れだ」とじっとしていると、なかなか揺れが収まらない。「ベランダから外を見てみると、一面が海だった」という。

「何が起きたかわからなかった」という長沼さんの言葉の通り、地震直後には閑上地区を含む名取市全体が停電となり、電話も一時全域が不通となった上、閑上の防災無線も鳴らず、巨大な揺れと、それがもたらす大津波の可能性を誰も知ることができなかった。

次第に自宅を取り囲むように大量のがれきが押し寄せ、3 月の凍てつく寒さの中、屋根の上で 25 時間も流されて過ごした後、自衛隊のボートで救出された。避難所へ行ってもなお、実感がわかないまま過ごし、「閑上の人みんな助かっている」と思っていた。

震災から2日後の 13 日、たくさんの人が遺体となって見つかり、行方不明者の紙が貼り出された。「震災から一週間経ってやっと、大変なことが起きたと感じた」と長沼さんは話す。

閑上では当時の住民の1割以上の750人が犠牲となった。一帯を見渡せる日和山(海拔6.3m)を囲むようにあった古い家々も、住民の尊い命とともに津波にのみ込まれてしまった。

長引いた避難生活、取り残された住民

2カ月半の避難所生活は、誰も明日が見えず必死で「人が人ではなかった」。そして同市愛島の仮設住宅に入居。毎日の「小さな大変」の積み重なりと、改善を求める要望が行政に伝わらないもどかしさが、被災者の心をさらに疲弊させた。ただ「プライバシーが守られた場所があることが嬉しかった」と長沼さんは振り返る。

だが、仮設生活が2年目、3年目になると、外へ出て新たな生活を始める人と、始めることのできない人の歩みの差が明確になった。仮設にいる時間が長引き、未来を描けない焦りもあった。

また、津波への恐怖から「もう閑上に戻りたくない」という住民が多い中で、市が半ば強引に進めた「現地再建」方針や、市長の「復興達成宣言」（2020年3月31日）に、「気持ちがついていけなかった」と長沼さんは語る。

前例のない大震災から、一日でも早く立ち上がらなくてはならない—という行政の焦りが、住民をいつの間にか取り残してしまっていたのかもしれない。

暗い話はしたくない 明るい話をしたい

苦しかった日々の中でも楽しかった思い出はあるという。閑上で生まれ育った住民の一人、阿部ヒデさん（67）は、再建された新しい閑上に戻って暮らす。「仮設住宅でボランティアが催したイベントを思い出す」と言う。震災以前と以後でがらりと変わってしまった閑上の町だが、「散歩をして思い出をマップに記入し残すことで、前向きな気持ちになれた」と取材で語った。「暗い話はしたくない、明るい話をしたい」と笑顔で話す阿部さんは今も、仮設時代の友人たちとお茶会を開く。

長沼さんも「仮設時代のボランティアとの交流を通して、たくさんの人と出会う機会があった」という。また、仮設時代に入居者たち、ボランティアの人たちと楽しく培ったコミュニティを、今の閑上の住民とつくるための活動に日々取り組んでいる。「楽しいと思っても楽しいと言えない時期があった」と語るが、「あっという間だった12年間で今、やっと振り返ってもいいと思える」。

立ち上がった人の声を伝え、誰かの希望に

実際に閑上に足を運び、そこに住む人と話すことで、被害の甚大さとともに地域住民の力強さ、たくましさを知った。そこにあった、ふるさとの町が全て消え、まっさらな土地に再び暮らしを始めるというのは、想像するだけでも簡単なことではない。簡単な道のりではなかったからこそ、その過程の一つ一つに思い出がある。震災という出来事だけでなく、そこから立ち上がった人たちの声を発信し、つなげてゆくことは、未来を模索するための希望になるのではないだろうか。

「懐かしい仲間と再び暮らしたい～関上の自治会長が投げ掛けた『復興』の意味を探して」

2011年3月11日に発生した東日本大震災から、13年になる。当時は小学生であった私も、今は大学生活が残すところ、あと1年となった。長いようで一瞬で過ぎたような歳月に、「復興」という言葉を新聞やニュースで何度見聞きしてきたことだろう。「復興」とは、いったいどのようなものか。何をもって「復興」と認められるのだろうか。そんな“答えのない”問いを考え続ける、宮城県名取市関上の長沼俊幸さん(61)を取材できた。津波で被災した後、避難所と仮設住宅で6年の生活を経て、市によって現地再建された関上に戻った。関上中央町内会長を務める。語ってくれたのは、災害公営住宅が並ぶ新しい街でのコミュニティ再生の難しさ。被災地が今も抱える問題や、町内会の現状にも触れながら、「復興」という言葉の意味を我が事として問いただしたい。

「復興」って、いったい何だろう？

「復興」：衰えた物事が再び盛んになること。また、再び盛んにすること。再興一。国語辞書を引くと、おおよそそのような文言が綴られている。

あなたは「復興」という言葉を聞いて、具体的にどのようなことを想像するだろうか。景観や立地を修復することをいうのか？ その地において失われた活気を取り戻す行為を指すのか？ でも、たとえ施設や景観がきれいに復旧されたとして、その地に戻った人々の暮らしも、気持ちも、つながりも、元通りに修復されると言えるのだろうか？

震災前の「うざい町」は津波に消え

名取市関上。400年来の歴史の漁港があり、地元の海で捕れる豊富な魚介が有名である。この地で生まれ育った長沼さんによれば、「良いことも悪いこともすぐ伝わってしまうような、住民同士の距離の近さが持ち味の街だった」。

初めて聴いて驚いたのだが、「自宅に鍵をかけずに外出する習慣があり、ご近所さんに留守中の冷蔵庫にでも『おまかね』(おすそ分け)をよくしていた」と、昔ながらのつながり、互いの信頼も厚かった故に安心して暮らせる場所。しかし、誰かの世間話がすぐに広まるところもあり、震災前は「うざい町だった」と、長沼さんの口から愛着を込めて表現された。

のどかな古い街の住民たちには、関上に津波は来ない」という観念も根付いていたという。あの日に被災した長沼さんも、自宅への津波到達寸前に「逃げろ!」と促されても、「そもそも津波って何なんだ?と、ピンと来なかった」と語った。それも無理はない。長沼さん自身も「関上に津波は来ない」と祖父から聞いていたからだ。

『地震が来たら、津波に用心』。関上のシンボルで震災前から唯一残る日和山(海拔 6.3 ㍎)の下に、こんな石碑が立つ。1933(昭和 8)年の昭和三陸大津波の後、その教訓を地元の先人が刻ん

で建立した。が、時が経つにつれて碑も教訓も忘れられ、正反対の誤った話が伝承されてしまったのだ。

長沼さんは、13年前の3月 11 日を回想した。自宅の外の道路が黒い水で濡れて、それがなぜか分からず、近隣は住民の避難を誘導する大声で騒がしかった。津波がばりばりと家々を倒して押し寄せるのが見え、奥さんと家の屋根の上に登り、津波に家ごと3つも流された。厳しい寒さが肌を刺す中、救出まで 25 時間も耐え続けたという。「家の外がすべて海!」という生まれて初めての驚愕をした。家も船も人も、何もかもが津波にのまれる光景を目にした閑上の方々の気持ちは到底計り知れない。

長沼さんにとって昔ながらのふるさととは跡形なく失われた。避難所や仮設住宅での生活を経て17年、現地に再建された閑上に戻った時、待っていたのは6階建ての新しいアパートが立ち並ぶ、見たことのない街だった。

行政と住民の価値観の不一致、自治会長の思い

閑上の災害公営住宅は、名取市が発注者になり、事業委託された民間の建設コンサルタント企業を介して6棟(計180戸)が建設された。掲げられたのは「安全で安心して快適に暮らすことができる」、「多様な世代がつながり、絆を感じる」、また「地域社会と連携した、地域が継続的に成長する『すまいとまち』」というコンセプト(株式会社 UR リンケージ 名取市閑上地区集合災害公営住宅整備事業紹介ページより)だった。

「『閑上らしさ』を感じられる街並み空間の形成」を謳ったが、町内会長になった長沼さんの目には、「行政は地域住民の『気持ち』に寄り添えていない」と映った。「行政の人たちは『これは便利だよ』って言うけどね、やったことない、経験したことないものは当事者にとっては苦痛なんです。そこを、使う人たちの思いにもっと寄り添えていたらなあ」

例えば、災害公営住宅の内部で移動手段として設置されたエレベーター。誰もが使用しやすくという目的上、居室が並ぶ各階の真ん中の位置にある。一見、高齢者が多い住民に配慮した造りと思われるが、長沼さん曰く、「長年平屋暮らしの高齢者は、エレベーターを使って移動する生活に不慣れ。外へ出るのも億劫になり、引きこもりがちな生活になってしまう」。

災害公営住宅には震災後、同じ仮設住宅の仲間だった住民もいる。が、入居者は、「機会の公平性」を優先した市が出身地域に関係なく「くじ引き」で決め、大半が見ず知らずの隣人同士になった。新たな交流を広げることができれば、地域コミュニティづくりも見込めただろう。が、住まう人が皆、社交的ではないだろうし、帰る家をなくした高齢の独居者が多い。そうした事情の理解、引きこもりを防ぐ配慮は、長沼さんら自治会の大事な役目になった。

実際に同じ問題について考える他大学の学生からも、「仮設でつながった人が定期的に交流できる機会が必要だ」、「入居者同士の顔の見えるコミュニティを今後も末永く継続させるには、若い世代の関わりが重要だと感じる」などの声が上がった(2018年1月20日の河北新報 ONLINE<311次世代塾>『生活再建の支援薄く／第1期第12回詳報』より)。

効率第一の行政、安らぎ求めた住民の「壁」

このように新しい閑上の整備は、現実には、災害公営住宅で暮らす住民同士のコミュニケーションに壁をつくる結果となった面はないだろうか。「利便」「効率」「時間」を優先した行政と、「安らぎの場」を求めた住民、双方の「復興」に対する価値観の不一致。それが生んだ環境は、当事者の声を生かして改善されていくべきではないのか。取材からそう感じた。

市は、閑上の被災者が仮設住宅などで暮らした時期、「現地再建」の方針を掲げ、「閑上への帰還」を問う意向調査を行った。その結果、「津波を経験したこともあり、怖くて戻りたくない。別な移転地を」と多くの人が回答し、帰還したのは旧住民の3分の1だけだった。だが、昔馴染みの仲間と再び暮らしたいと願う人は、今もたくさんいるはずだ。

「私は、閑上の仲間たちとまた一緒に暮らせるなら、場所はどこでもよかった。それが『復興』だと思っていた。だが、住民はばらばらになり、私の『復興』は消えてしまった」、「行政はね、周りから良く見られることばかり考えているんだ。こうやるとけば周りから文句つけられないだろうって」。そのように語る長沼さんの表情には失望感が浮かんでいた。

「誰にとっても公平、平等であること」を重視した市の方針は、本当に閑上の住民の幸せにつながったのだろうか？

被災に「ギャップがある」という重い言葉

「『復興』って何か？と誰に質問しても、今まで納得いく答えをしてくれた人はいない。それぐらい、一筋縄では答えを出せない、難しい問題なんだ」

新しい閑上のコミュニティづくりを模索してきた長沼さんの本心だ。仮設住宅から移った当初、町内会に携わる気はなかったという。けれど、周りから推されたことで引き受ける決心をし、19年3月、初代の閑上中央町内会長になった。

以来、「皆で顔を合わせ、おしゃべりをする」機会をいつも大切にしてきた。たとえ、ドアの外から声を掛けても出てこない人だったとしても、決してそのままにせず、返事があるまで声を掛け続けるという。住民を誰一人、取り残したくないという思いがその言葉にある。

長沼さんにインタビューを行う以前は、私も「復興」という言葉の意味を、震災により生じた被害を「修復すること」と捉えていた。加えて、私は津波で甚大な被害を受けた当事者のお話を聴くのは初めての経験だった。それを通して、私は自分の「復興」観が180度変わったと実感している。

何度か取材をする中で、長沼さんが繰り返し語った印象深い言葉がある。それは、震災には大なり小なり「ギャップ」がつかまとうということ。「被害に遭い、実際に家を流されてしまった人たちと、家の片付け程度で済んだ人たち。遺族になった人と、私のように、ならなかった人。あるいは、経済的に余裕があり家を再建できた人と、そうではない人。『簡単にできるだろう』と思っていたことと、待っていた厳しい現実」。語られた「ギャップ」という言葉の意味は深く、重い。

閑上から問われた「復興」の意味、考えてほしい

私は自身もこの「ギャップ」に当てはまる人間だと考えている。私も被災地となった街の出身で、一人の被災者ではあるが、メディアの報道を通してしか津波の姿を知らないし、自宅の地震被害も大きくはなかった。長沼さんらは、津波で自宅を失い、避難所生活を経験し、苦難の歳月を生きてきた人々。この先、互いの溝が１ミリの隙間もなく埋まることはおそくない。それに、これまで挙げてきた難しい問題に対し、明確な答えというものは出せないとは思っている。けれど、被災者の心情に耳を傾け、理解することはできる。

私も、被災体験をじかに語ってもらうまで、知らなかったことは数えきれない。だからこそ、自分の知らない場所で苦しい生活を強いられてきた人、現在もやるせない思いを抱えながら暮らしている人がいるという事実を、自分の記憶に留めておくだけでなく、外につなぎ、伝承していくべきだと強く思った。

最後に私なりの答えをまとめるとすれば、「復興」とは、被害を受けた当事者の方々の心や感情など、「形のないものが満たされる」ことだと考えた。読者の皆さんも、震災後13年にしていまだ答えの出ない「復興」という言葉の本当の意味を、どうか一度考えてみてほしい。時をさかのぼって当事者となることは叶わなくとも、事実を共有し合うことで、あなたも、いつだって被災者の心に寄り添う理解者になることはできるのだから。

閑上支援に携わった本学職員から、震災以来の歩みを学ぶ＝2023年10月12日



「3.11 イコール地震・津波」ではない～伝えたい、「避難所」の苦難と教訓

私たちは「あの日」を忘れることはないでしょう。東日本大震災。巨大な地震、津波をいっぺんに経験しました。東北の太平洋岸で大きな被害があったことは今の小学生も含め、誰しもが知っていることです。しかし、地震・津波の被害だけが震災なのでしょうか。被害を伝えるだけではない、被災地の多くの人が経験したのが「避難所生活」。私もふるさとで同じ経験をした当事者の一人として、その記憶を掘り起こし、当時の反省を基にひもときたい。

あの日あの時、ふるさとの3.11

あれからまもなく 13 年になる。震災って何だろう？ 東北の人の印象に残っている東日本大震災とは、2011 年 3 月 11 日の午後 2 時 46 分、三陸沖を震源に起きたマグニチュード 9 の地震と、それに続いて沿岸部を襲った津波の被害です。岩手、宮城、福島を中心に約 2 万 2215 人の死者・行方不明者を出しました。現在でも「復興」の事業が終わっていない、その目標から遠い地域も多く、人の心にも深い傷跡がまだ残っているのが現状です。

私のふるさと、気仙沼市唐桑地区も被災地になりました。海とともに生きてきた半島の町は、沿岸部を中心に見る影もなく津波にのみこまれました。

そもそも「震災」は、地震によって引き起こされた災害を指す言葉です。そうした大きな「被害」の認識は誰もがあると思います。しかし、それだけが伝えられる中で、忘れられた記憶があるのではないかな。私も経験した「避難所」のことだ。そのことを記録したいと思う。どういう問題があり、どのような教訓があったのか、理解している人は少ないでしょう。そういった点に着目し、さらに絞って「避難所」について話したいと思います。

関上の当事者の体験を聴く

このテーマを書こうと考えたきっかけは、昨年 10 月、授業で地元名取市の被災地・関上を訪ね、関上中央町内会長の長沼俊幸さん（61）を取材したことだった。

関上では 750 人もの住民が津波の犠牲になりました。さらに海岸の平坦な地形であったために津波が遠くまで到達し、「一つの町としては東北でも一番の被害になった」と長沼さんは話します。被害が大きくなってしまった背景には、「関上には津波が来ない」という思い込みが住民に根強くあったからでした。

1933（昭和 8）年の昭和三陸大津波。関上では幸いにも津波で人命が失われることはありませんでしたが、当時の住民は「地震が来たら、津波に用心」という大きな石碑に残しました。しかし、それから時を経て忘れられ、「関上に津波は来ない」という逆の伝承が残ってしまったのです。「ここには津波は来ないから大丈夫。祖父からそう教えられた」と長沼さんも語りました。住民たちの思い込みを衝いて関上を襲ったのが東日本大震災の津波でした。

津波で長沼さんは自宅を流されてしまい、避難所で過ごしました。避難所では、皆が辛い思いをして助け合う姿をみなさんは想像すると思います。もちろん、そうです。が、長沼さんは語りました。「表に出ていない苦労がたくさんあった」と。

段ボールの間仕切りもなく、プライバシーのない環境、毎日同じ食事、トイレの衛生状態などからのストレスです。また、他の避難所と比べられ、「ダンボールがない」といったクレームも出されたそうです。

このような生活が続き、精神的余裕がなくなり、人間関係がギクシャクしていったそうです。次に長沼さんが経験したのが、全員分がそろうまで取っておいた支援物資が盗まれるなどの問題でした。しかし、みんなが我慢をし、不平不満を出せなかったのも、こういった負の面の問題は表には出てこなかったそうです。

よみがえった故郷の避難所の記憶

ここからは、私のふるさと気仙沼市唐桑での経験を書きたいと思います。当時6歳で、幼稚園で大地震に遭いました。唐桑は山がちな半島であるため、津波によって市内へ向かう道が分断され、陸の孤島状態になりました。私はその日のうちに祖父母に連れられて避難所に行きました。幼かった自分は周りの重い空気にじっと合わせていました。

両親は市内で勤めているため、その日は会うことはできず、父とは3日後に、母とは1週間後に再会できました。2人に会えたときとても嬉しかったのを覚えています。

何日か避難所で生活をして、私は幼かったので気になりませんでした。間仕切りはあるものの、家族のプライバシーはなかったなと思います。私がいた避難所でも窃盗は起きました。トイレなどの設備もしっかりとはなく、外で用を足していました。

「隣の芝生は青い」という慣用句がありますが、震災のときは多くの人がこの心境でした。幸いにも我が家は津波の被害を免れ、家族も無事だったので、1カ月足らずで自宅に戻れました。わざわざ自衛隊員たちが家まで支援物資を届けてくれたので、私は祖父と一緒にご近所にそれを配って回り、他の家族も気仙沼市内も含め、それぞれ配りに行きました。

そんなさなかに「唐桑ばかりずるい、なんであんだほだけなのさ（そっちの方だけ食べ物があるの）」と言われることがありました。この言葉は今も、とても印象に残っています。同じ被災者への助け合いの善意が、このような感情を返され、少し心に傷のように残るものがありました。

同じ苦難を繰り返さないために

長沼さんは自らの経験から、「何が大変だったかを表に出すことが大切だ」、「その時々気持ちを考えてほしい」と語りました。

何が必要だったか、問題だったかに着目して、言葉や行動で表しましょう。見えないものだからこそデータとして残し伝えることが大切だ、とも。

私も同感です。実際のところ経験したことがなければ、具体的に認知し、対策を立てることはとても難しいことです。しかし、教訓から学び、備えることは誰でもできます。震災は、その日のうちに終わる

ものではありません。震災前の備えは大事ですが、震災関連死を防ぐ上でも、その後の対策の方が重要だと私は思います。日本の中でもどこでも災害は起こります。新たに能登地震もありました。長沼さんと私のふるさとの経験が、この記事を読んでもらった方の役に立てば幸いです。

「私は語り部ではない」～それぞれの伝承のあり方

東日本大震災の出来事を風化させず、未来につなげるために必要なことは何だろうか。あの日から、もうすぐ 13 年が経つ。「震災」を知らない子供たちが年々増えていく中、名取市閑上で津波を体験した自治会長、長沼俊幸さん(61)から「伝承」への思いを聞いた。「私は語り部ではない」と語った、その意味を考えたい。

津波をめぐる言い伝えの真実

2011年3月11日、午後2時46分、東日本大震災は起きた。その規模はマグニチュード9と凄まじく、東北の太平洋沿岸部は巨大な津波に襲われた。長沼さんは、仕事先から戻った閑上の自宅でその瞬間を迎えた。

古い家並が連なる街を押しつぶす津波に追われて、奥さんと二人、家の 2 階、3階、屋根へと逃げ、家ごと3つも流されながら奇跡的に助かったのだという。

「閑上に津波は来ない、と地元の誰もが信じていた。実際に津波が来たときは、何が起きたのか分からなかった」と長沼さんは取材で語った。

「閑上に津波は来ない」。閑上では事実、そう言い伝えられてきたという。大きな地震が起きても、仙台湾を挟んだ牡鹿半島で津波はせき止められ、閑上には来ない、大丈夫だと。長沼さん自身も祖父から聞いていた。しかし、それは誤りだった。背景にある過去の地震では、閑上で津波が観測されていた。

1933(昭和8)年3月3日に起きた昭和三陸地震。その津波は閑上にも達し、人命が失われることはなかったが、当時の先人は子孫への教訓として『地震が起きたら、地震に用心』と刻んだ石碑を日和山のふもとに建てた。

「石碑があることは知ってはいた。私もその周りは遊び場だったが、難しい字で書かれていたため、誰も内容を知ろうとしなかった」。教訓は時代と共に風化し忘れ去られ、間違った形で未来の子孫たちに伝わっていたのだ。

「語り部」というイメージ

昔の津波の教訓が閑上で伝えられなかった事実、その結果である津波犠牲者 750 人という痛ましい経験。長沼さんは閑上中央町内会長として新しい閑上の街づくりに取り組みながら、地元を訪れる大学生ら多くの若者に震災体験を語っている。しかし、私は長沼さんの取材で衝撃的な言葉を聞いた。「私は語り部ではない」と。

それが意味するもの、語り部とは何を指すものなのか、私はよく分からなくなった。震災当日の体験や、その後の仮設住宅での苦勞、現在の街づくりの苦心などを話してくれた長沼さんは「まさに語り

部だ」と感じた私は、驚きを隠せなかった。

だが、思い当たったこともある。私たちが強く抱いている「語り部」のイメージとは、“家族を亡くされた遺族”の話なのではないだろうか。しかし、長沼さんは幸いにも家族を一人も失わなかった。「だから、わが子を亡くした人の思いは分からない。そうした方々が語り部の活動をしてられるが、私はそうではない」

初めて知った避難所、仮設の体験

長沼さんが語るのは、多くが避難所や仮設住宅の体験、新しい閉上の街づくりの苦心だ。震災のさまざまな悲惨な出来事は他の語り部さんを通して知ることができるが、「それから」を被災者がどう生きてきたか、私も聴いたことがなかった。

東日本大震災での避難所の運営は表向き問題がなかったように思われているが、実際は困難がつきまとった。例えば、大勢の人が使うトイレの衛生状態、菓子パンなど毎日同じような食事、間仕切りの段ボールもなく常に周りから見られている環境。体験者にはとても苦痛だったそうだ。「我慢をしなければいけない、不満を言ってはいけない」という思い込みから、ストレスが積み重なり、争いごとが増えていった。それらはすべて長沼さんが語ってくれた、私が初めて知った事実だ。

「他の避難所では段ボールが支給されていることを知り、運営する市の担当者に伝えたことで、避難者たちはある程度落ち着きを取り戻した。言わなければ何も解決してくれない。その場で当たり前に発信しなければいけない。それが教訓だった」

「被災者には、被災した後もさらに苦難が続く。そんな体験も伝えなければ忘れられる。次の災害が起きた時のために、きちんと記録され、生かされなくては」

多様な形で「あの日」の伝承を

「伝承」とは優しく前向きな言葉だ。だが、被災した人にとっては、大きな傷であることを忘れてはならない。私たちはあの日の出来事をしっかりと胸に刻み、これからも起きるであろう災害に備えなければならない。今や、東日本大震災を知らない世代の子どもたちも増えた。その分、自分に関係ないことだと、過去の被災の記録としか見ようとはしないだろう。長沼さんもこう話す。

「話だけでは、津波のことはよく分からない。でも、避難所での生活などはイメージしやすい。『わが事』として知ってもらうことが大事なのだと思う」

「3.11」を経験したすべての人に、あの日の記憶がある。同じ日、同じ時刻、私はどんな行動をしたのか、どんな話をしたのか、どんなニュースが流れていたのか—など、それは人によってさまざま。あなただけの「あの日」があり、どんな人も多様な「語り部」になれる。時代の流れがまた1年、先へと進む今、どんな「3.11」を私たちは次の世代に語れるだろうか。

「空白の6年間～みなし仮設からふるさとに帰るまで～」

2011年3月11日、午後2時46分。三陸沖を震源とするマグニチュード9の大地震が発生し、東北地方の太平洋沿岸部に大津波が押し寄せた。5000人余りが暮らした宮城県名取市閑上地区も8メートルを超える大津波で一瞬にしてのみ込まれ、古い漁港の街の日常とともに750人の命が奪われた。

閑上の人が経験した被災後の暮らし

その日の大地震発生の後、閑上の海べりに住んでいた吉田よう子さんは、夫が運転する車で愛犬と、近くに住んでいたおばあさんと共に閑上小学校に避難した。「津波から逃れようとで道路は渋滞し、反対車線を通して避難したため、運よく助かった」と振り返る。動物を連れて避難してきた人はほかにもおり、避難所の外で飼っていたという。吉田さんの愛犬、ゴン太は大型犬のため、やむなくワゴン車に乗せていた。

避難所では、8畳の広さに16人が寝泊まりし、毛布3枚を分け合って過ごした夜もあった。「震災当時のことは思い出したくないけれど、支援でいただいた枕や、ボランティアの方がきれいに洗浄してくれた写真などは、いろいろな想いがこもっているから捨てられない」と吉田さんは語る。

仮設住宅～閑上の人と暮らしたい

長沼俊幸さん(61)は津波襲来の前、奥さんと2人で自宅の3階部分に当たる屋根裏に逃げ込んだ。そのまま津波に3度も流され、25時間ほど屋根の上で救助を待ち続けた。避難所生活の後、同市愛島にできた仮設住宅に移り住んだ。居室は狭かったが、182世帯が身を寄せ合うように暮らし、支援のボランティアが毎週来てくれた。

しかし、空前の規模の大災害のため、災害救助法で2年と想定された仮設住宅での生活は長引いた。自宅を再建するため退所する人たちを見送る焦り、津波で流されてしまった家のローンが多額に残る現実。「場所はどこでもいいから、閑上の人とまた一緒に暮らしたい。それが『復興』だと思っていた」。

現実には、津波の恐ろしさから閑上に戻りたい人は少なく、とにかく安心して暮らせる内陸の移転先を希望する人が、閑上の「現地再建」の方針を打ち出した市の意向調査で3分の2に上った。ふるさとの仲間の離散に複雑な思いを抱きながら、長沼さんは2017年7月、かさ上げ地に再建された閑上に帰った。

語り継ぎたい仮設住宅の体験

4畳半に大人3人が住むような仮設住宅の狭さから、民間住宅を避難者のために借り上げる「みなし仮設」に住む選択をした住民もいた。その一人が吉田さんだ。同市館腰体育館での42日間の避難生活の後、市内のアパートに移った。隣人同士の仲も暮らしの絆も深かった閑上は、古い街並みと

ともに、あの日を境に消えた。だが、みなし仮設にあっても吉田さんは、孤独を感じなかったという。それは、吉田さん自身が世話好きで、さまざまな人と交流できたからだ。そして 6 年間のみなし仮設での生活を経て、再建された閑上に帰ってきた。

2019 年3月に閑上中央町内会が発足。長沼さんが初代の町内会長になった。震災前の閑上出身の住民、新しい街に引かれた若い家族らの共生のコミュニティづくりに苦心している。吉田さんも旧住民と新住民の繋がりに悩むことがあるという。しかし、「閑上なまりのズーズー弁や昔なじみの顔は、今も変わりません。新しい閑上にも魅力が詰まっています。あなたも閑上を好きになってほしい」と語る。みなし仮設での生活を経験した閑上の住民に出会い、聴いたのは、メディアの報道では取り上げられないことばかりだった。吉田さんの明るく前向きな生き方を伝えたいと思った。